

人生の贈りもの

京大人文科学研究所所長 山室信一(63)

2

攻撃仕掛け続ける 無敵の「豆三四郎」

戦後「これからは頭の戦いだ」と言う父親からは厳しく勉強をさせられましたか。

戦後「これからは頭の戦いではないまでもある程度の漢字も読めたので、活字文化に親しんでいたと思います。」

そんな記憶はないですね。幼稚園のころから家の近くに2軒あった貸本屋に日替わりで通いました。読んでいたのは水木しげるとか、つげ義春とか主にマンガでしたが、小学校に入るま

——では学校の成績は。本や雑誌からいろんな知識を得ていたので、授業の内容が物足りなくて聞いていませんでした。それで私がうるさくしないようにと、担任の先生が父に百



10歳の誕生日に。「私を研究者ではなく『柔道少年』として覚えていく地元の人もいます」——本人提供

科事典を買って与えるように言ってくれました。授業中はそれをペラペラめくっていました。九州の炭鉱で事故があったとニュースで聞いたら坑にはどんな形があるのかとか、なにがきっかけだったか覚えていませんが武士の切腹や敵討ちにはどんな方法があるのかとか。脈絡なく、なんでも調べていました。

一方で、父から言われて小学3年のころから柔道を習いました。「自分の身は自分で守れ」と。矢野道場という肥後藩時代から続く町道場に通いました。稽古好きで、体が小さかったので「豆三四郎」と呼ばれていました。市内の柔道大会で十数人抜きしたこともあります。

得意技は。小内(刈り)をかけて次に大

内(刈り)、相手の体勢を崩したところで背負い投げ。柔道の基本の流れですね。中学校のときは団体戦で大将でした。一番小さい大将でした。どんな相手でも引き分けに持ち込むことができた。試合時間の5分間、絶対に休まず攻撃を仕掛け続ける戦い方でした。攻撃は最大の防御です。さすがに高校に入っ

たら、強豪とは体格もスピードも違うので通用しなくなりましてたけどね。そのころ興味は数学に移っていました。

通っていた県立熊本高校は数学の定期試験で満点を出さないことで知られるほど採点が厳しかったのですが、数年ぶりに100点満点を取ったことを覚えています。受験雑誌「大学への数学」でどれだけ鮮やかに問題

を解くかを競うコンテストにも投稿していました。入賞すると黒色のバインダーなどをもらえるのも楽しみでした。

——なぜそのまま理系の学問に進まなかったのですか。

名古屋の東海高校に、私より1学年上で後に「数学のノーベル賞」といわれるフィールズ賞を受賞された森重文さんがいました。「大学への数学」のコンテストで目の覚めるような天才的な解法をされていて、絶対にならぬと思うって数学の道をおきらめました。森さんは想像していたように世界的な数学者になられましたね。昨年まで京大数理解析研究所の所長をされていて、私が京大人文研所長になって1年間だけ同じ所長仲間だったんです。談笑のおりに「あなたのせいで数学をあきらめました」と話したら、「そんなこと言われてもね」って苦笑されていました。

(聞き手・河野通高)